

ひとり親家族の家庭教育と子育て

表 真 美

(発達教育学部)

I. 研究の目的

ひとり親家族の増加は、家庭教育力の低下と結び付けて論じられることが多い。ひとり親世帯は、離婚の増加を背景に大きく増えている。1990年代になり徐々に離婚件数が増加していることは、社会全体の離婚観の変化と無関係ではない。「離婚も止むを得ず、人生をやり直す再出発点である。離婚をした方が得であり、夫婦関係がうまくいかなければ、子どものためにも離婚した方がよい」といった前向きな方向に意識が変化しているといわれる(神原2004)。実際、未成年子のいる夫婦が離婚する割合は、全離婚件数のおよそ6割であり、そのうち7割は母親がすべての子どもの親権者、2割が父親が親権者となり、残り1割は複数の子どもの真剣を夫婦が分け合っている。

神原は、大阪市で行われた調査などから、ひとり親家族の生活困難な実態や、複合的な子育ての悩みを抱えていることを明らかにしてきた(神原2006, 2007, 2008, 2010)。また、経済格差による子育ての2極化が問題になるなか、低所得層に多くの母子世帯が含まれていることも事実であり、社会的支援の必要性が論議されている(湯澤2009, 竹村2009)。平成18年に厚生労働省が行った調査では、平成17年度の母子世帯の平均年収は213万円、一般世帯平均の38%であった(厚生労働省2006)。

一方、離婚の急増を背景に、平成14年、「母子及び寡婦福祉法の一部を改正する法律」が成立、平成15年3月、厚生労働省から「母子家庭及び寡婦の生活の安定と向上等の措置に関する基本的方針」が提出され、母子家庭への支援は「給

付から自立促進」へ大きく転換した。すなわち、これまでの児童扶養手当で中心の支援から就業・自立に向けた総合的な支援となり、各自治体において母子家庭の自立促進計画を定めることとなった。これらの改訂により、児童扶養手当が実質削減される家庭が増加し、生活困窮度がますます高まるのではないかと懸念が広まった(神原2008, 中野2008)。各自治体は、独自の計画に従って、保育所の優先入所などの①子育て・生活支援のほか、②就業支援、③経済的支援などを行っている(澤田2008, 室2008, 本村2008)。

ひとり親家族支援の具体的内容を検討するには、ひとり親家族の子育て、家庭教育についての実態を知ることが必要である。

これまでは、ひとり親家族のみを対象として実態調査が行われてきた。本報告では、幼児を育てる家族を対象に行った調査において、ひとり親の母親と判断できる161名の調査対象者が含まれていた。そこで、2人親の家族と比較することをとおして、ひとり親家族の子育てと家庭教育の実態を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 使用データ

3・4・5・6歳児をもつ保護者に対する質問紙調査のデータを用いた。

2009年1月中旬にK市の全認可保育所から乳児保育所を除く246箇所、全私立幼稚園99箇所、計345箇所に質問紙調査の依頼文書を郵送したところ、保育所44箇所、幼稚園27箇所より協力の回答を得たので、2月初旬に各保育所、幼稚園の3・4・5歳児の数に応じて調査票を郵送し

た。保育所、幼稚園において3・4・5歳児保護者に調査票が配布され、留め置き法により調査が実施された。2月下旬より3月に保育所40箇所、幼稚園24箇所より回収された調査票の返送があった。有効回収数は保育所1,617票、幼稚園2,909票、有効回収率は各々59%、82%である。計4,526票を分析対象とした。

主な調査項目は、子どもの生活習慣、塾・習い事、子どもの性格認知、将来への希望、家庭教育、子育て支援の利用、子育て感、子育て観である。

調査対象となった幼児は3歳児4.6%・4歳児27.8%・5歳児31.7%・6歳児27.7%、男児50.2%・女児47.1%、保護者（記入者）は母親95.9%・父親2.6%、73.3%が30歳代であった。

2. 変数の設定と分析方法

(1) 独立変数

独立変数は、ひとり親の母親か否かの変数である。ひとり親の母親を区別するために、「子育てについて夫婦で話し合う」ことの頻度を問う質問の4つの選択肢に加えて、「5. 該当しない」との選択肢を設けた。「5」を選択した161名をひとり親の母親と判断した。この方法では、ひとり親か否かを正確に区別できていない恐れがある。しかし、保育所、幼稚園をとおして不特定の保護者を対象に行った本調査では、人権に配慮した調査票である必要があり、止むを得ない処置であった。母親の対象者から、すべてのひとり親の母親を区別できていない、また、ひとり親ではないが夫の協力がまったく得られない母親が含まれている恐れがあるが、この161名は、一部にみられた自由記述からも、ひとり親の可能性が極めて高いことが推察できた。

(2) 従属変数

従属変数は、家庭教育、習い事、教育期待、子育て感、子育て意識、子育てネットワーク、子育て満足度である。以下に、各々の変数について述べる。

① 家庭教育

家庭教育は、日常的な家庭での共同行動を含

む教育に関する事項15項目を設定し、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢を設けた。図1に「よくある」「ときどきある」の結果を示す。「一緒に話す」「一日の出来事を書く」頻度が高い一方、家族で出かける図書館や美術館に出かける頻度は低くなった。

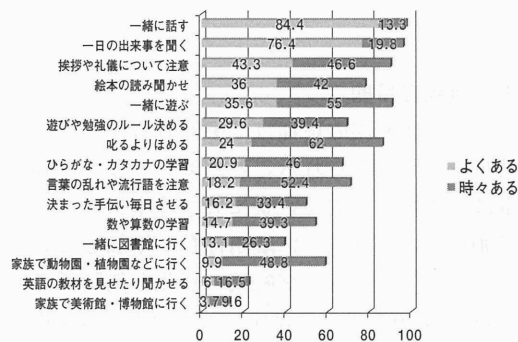


図1 家庭教育

② 習い事

習い事は、「何もしていない」「水泳」「水泳以外のスポーツ教室」「地域のスポーツチーム」「バレエ・リトミック」「楽器の個人レッスン」「音楽教室」「お絵かきや造形教室」「習字」「そろばん」「英語」「計算・書き取りなどのプリント教材教室」「通信教育」「小学校受験のための塾や家庭教師」「その他」の15の選択肢を設け、複数回答とした。「何もしていない」との回答が41.8%、習い事は水泳が21.3%でもっとも多く、次いで水泳以外のスポーツ教室（13.3%）、通信教育（12.4%）であった。

③ 教育期待

教育期待は、「将来お子さんをどこまでの学校へ進学させたいとお考えですか」の質問に、「中学校」「高校」「専門学校・各種学校」「短期大学」「4年制大学」「大学院」「その他」の7の選択肢を設けた。4年制大学が54.7%と過半数を占め、次いで高校が12.3%、その他（9.3%）では「本人次第」という回答がほとんどであった。

④ 子育て感

子育て感については10項目をあげ、「日ごろの

子育てに関し次のように思うことがありますか」との問いに対し、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢を設けた。10項目の質問は、牧野による14項目の育児不安スケールの中から、イライラの状態「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」「自分は子どもをうまく育てていると思う」、育児不安兆候「子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある」、育児意欲の低下「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」「育児によって自分が成長していると感じられる」「毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う」「子どもを育てるために我慢ばかりしていると思う」の7項目を採用した。残りの3項目は育児不安兆候として「子育てに失敗しているのではないか」「子どもがわずらわしい」、また今日の母親の趣味や職業を勘案し「子育てのために趣味や仕事を制約される」との項目を加えた。牧野のスケールからの質問の文言は意味が変わらない程度に短くなるよう修正した。図2に「よくある」「ときどきある」の結果を示した。「子どもと一緒にいると楽しい」「子育てによって自分が成長している」というプラスの考えに肯定する母親は9割前後でとても多いが、「毎日同じことの繰り返し」「仕事や趣味を制約される」「子どものことでどうしたらよいかわからない」と思う母親も5割前後いた。「子どもがわずらわしい」と思うことが「よくある」と答えたのは1%、43人で少ないが、「時々ある」を合わせると829人で、母親全体の19.3%にのぼる。

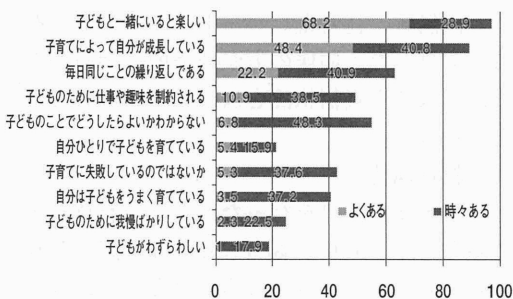


図2 子育て感

⑤ 子育て意識

子育て意識は、「あなたは子育てに関しどのような考えをおもちですか。」との質問に関して、図3に示す4項目について、「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「少し当てはまる」「まったくあてはまらない」の選択肢を設けた。「子育ては父親との共同」と考える割合は80%以上と高かった。

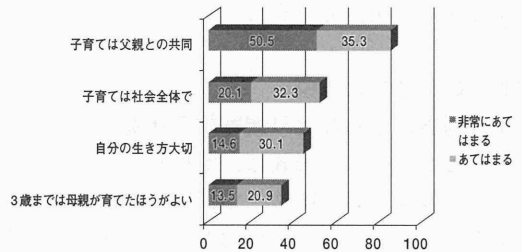


図3 子育て意識

⑥ 子育てネットワーク

子育てネットワークは、図4に示す5項目について、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ぜんぜんない」の選択肢を設け、「夫婦で話し合う」「夫が家事育児をする」に関しては、「該当しない」の選択肢を加えた。これらの2変数を除いた3変数を従属変数に用いた。

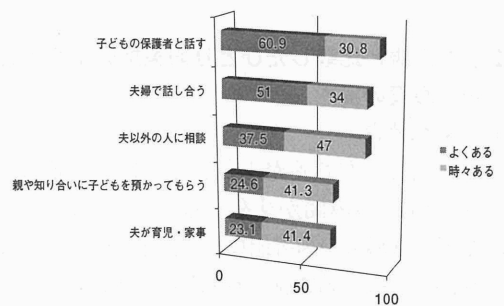


図4 子育てネットワーク

⑦ 子育て満足度

「あなたは現在、お子さんの生活習慣やしつけの状況に全体として満足していますか。」との質問に、「とても満足している」「まあ満足して

いる」「あまり満足していない」「まったく満足していない」の4選択肢を設けている。全体の各々の回答率は、4.6%、67.6%、25.1%、1.5%であった。

(3) 分析方法

ひとり親か否かを独立変数に、家庭教育、および子育てに関する上記の一連の変数を従属変数として、T検定、あるいはカイ二乗検定法によるクロス集計分析を行った。

Ⅲ. 研究結果と考察

1. 対象とするひとり親家族の状況

ひとり親家族の母親は、幼稚園に子どもを預ける母親が29名(18%)、保育所は132名(82%)であった。平均子ども数は1.82人であり、2人親の家族の平均子ども数2.08人よりも有意に低くなった。母親の年齢は、20歳代36名(22.4%)、30歳代95名(59%)、40歳代28名(17.4%)であり、2人親と比較すると20歳代の母親が有意に高くなっている。職業は、フルタイム56名(34.8%)、パートタイム78名(48.4%)、自営5名(3.1%)、無職20名(12.4%)である。親と同居している者は55名(34.2%)、別居106名(65.8%)であった。保育所に預ける比率、フルタイム・パートタイム、同居の割合が、2人親家族よりも有意に高くなっている。

2. 2人親と比較したひとり親家族の子育てと家庭教育の実態

① 家庭教育

2人親との有意差がみられたのは、15項目中「絵本や本の読み聞かせをする。」(p=0)、「一緒に近所や京都市の図書館に行く」(p=0.001)、「休みの日に家族で動物園・植物園・水族館に行く」(p=0)、「休みの日に家族で美術館や博物館に行く」(p=0.29)の4変数であった。よくある4、時々ある3、あまりない2、ぜんぜんない1の平均値をひとり親、2人親別に図5に示した。いずれもひとり親の頻度が低くなっている。これらの家庭教育は、優先順位から判断すると、目に見える効果がすぐに期待できない性質のも

ので、必要不可欠ではなく、付加的な情操教育といえよう。時間的余裕と小さい子どもをつれて外出するための人手も必要である。ひとり親の母親が行いにくい家庭教育の具体的内容が明らかになったといえる。

さらに、ひとり親の母親による解答だけを取り出して、年齢、職業、同別居による家庭教育を分析したところ、一緒に図書館に行く頻度は、40歳代が他の年代よりも高く、また、同居の母親が別居の母親よりも高い結果となった。

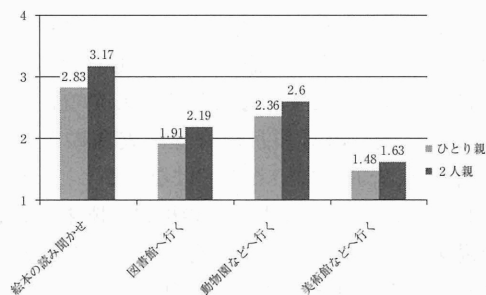


図5 ひとり親・2人親別、家庭教育

② 習い事

3～5歳児が調査の対象であるので、何もしていない子どもが全体の4割以上であったが、習い事の平均数はひとり親は0.64、2人親は0.99であった。T検定の結果、ひとり親家族の子どもは有意に習い事の数が少ない結果となった(p=0)。後述の自由記述(B)にもあるように、経済的に困難な状況がうかがえる。

習い事の数に関しても、家庭教育と同様にひとり親のなかで分析を行ったところ、同居の方が平均数が多く、職業では、平均数が、フルタイム、無職、自営業、パートタイムの順で有意に高くなった。同居の方が経済的に余裕がある、また、職業も経済状況を反映しているものと考えられる。

③ 教育期待

クロス検定集計を行ったところ、有意な差が認められた(p=0)。図6に示すように、高校と大学に大きな差がみられる。ひとり親は大学に進ませたい割合が大変低くなり、高校が2人親の約2倍になっている。習い事と同様、経済的

な状況が背景にあることが推察される。

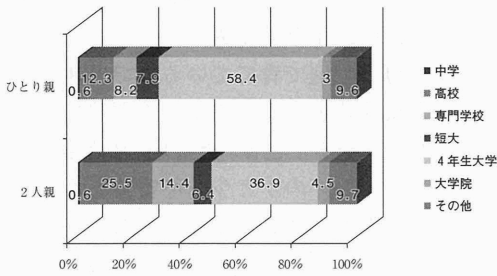


図6 ひとり親・2人親別, 教育期待

④ 子育て感・子育て意識

T検定を行った結果、子育て感は10項目中3項目に、子育て意識は4項目中3項目に有意差がみられた。結果を図7に示す。子育て感で有意差があったのは、「自分は子どもをうまく育てている」(p=0.06), 「自分ひとりで子どもを育てている」(p=0), 「毎日同じことの繰り返しである」(p=0.051)であった。ひとり親の母親はうまく育てているという自信が低く、当然のことながらひとりで育てているという実感が2人親を大きく引き離して高い。また、子育て意識は、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」(p=0.001), 「子育ては母親だけでなく父親との共同によるものだ」(p=0)。「子育ては親だけでなく社会全体で行うものである」(p=0)に有意差がみられた。子育ては父親との共同という考え方が2人親よりも大きく下回ったのは当然の結果であり、自分の生き方を大切にしたい、子育ては社会全体で行うものという考え方が2人親より多かったのも、彼女たちの生き方を反映した回答といえよう。

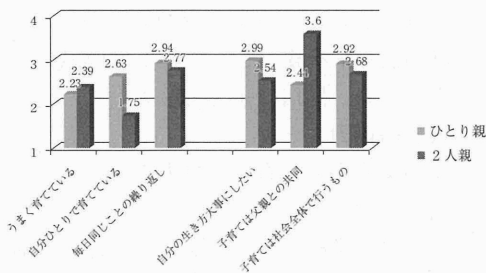


図7 ひとり親・2人親別, 子育て感, 子育て意識

⑤ 子育てネットワーク

子育てネットワークに関しては、T検定により「同じ年くらいの保護者と話す」(p=0)は平均値が2人親よりも低く、「親や知り合いに子どもを預かってもらう」(p=0.002)は、逆に高い結果となった(図8)。ひとり親は、親との同居の率が高いことから、子どもを預けやすい環境にある母親が多いと考えられる。子どもの保護者と話す頻度が低いことは、時間的余裕がないことや、社会的偏見のために孤立しがちな状況なのではないか。後述の自由記述からも、社会的偏見(I)や、子どもの保護者(P)に関する記述がみられる。

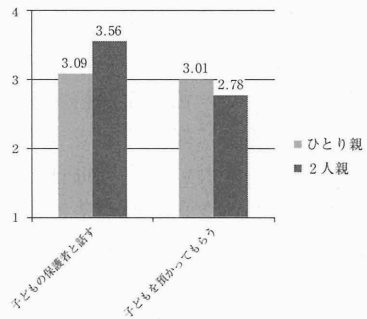


図8 ひとり親・2人親別, 子育てネットワーク

⑥ 子育て満足度

子育て満足度の平均値は、ひとり親の母親が2.62, 2人親は2.76となり、T検定の結果、ひとり親が有意に低くなった(p=0.007)。母親の親族(子どもの祖父母)との同居が多いものの、66%, 106名の母親が一人で子育てを行っている。家庭教育についての調査結果からは、経済的、時間的にも余裕がないことがうかがわれる。子育てネットワークの結果からは、孤立した実態もうかがいあがる。このような状況が家庭教育や子育て全体の満足度の低下につながっているのであろう。

3. ひとり親家族の母親の自由記述

質問紙の末尾に「子育てについて、お悩みやご意見などありましたら、どんなことでも結構ですので、ご記入ください」として自由記述欄

を設けたところ、全体の15.6%、684名の記入があった。ひとり親家族の母親は、161名中21名に自由記述がみられた(13.0%)。自由記述には、ひとり親家族であることを述べたもののほかに、ひとり親か否かにかかわらない子育てについての悩みや意見が述べられていた。以下に、その一部を示す。かっこ内には母親の年齢、職業、子どもの祖父母との同別居、子ども数を示した。下線は筆者による。

① 子どもに対し申し訳ないと思う気持ち

ひとり親を自分の責任とし、子どもに申し訳なく思い、社会を批判する気持ちを2名の母親が述べた。

A：「うちは母子家庭です。子どもに「ごめんね」とよく思うんです。毎日生活するのに精一杯なせいとか、もしくはそれを理由にしているだけか、色んな余裕がなくて、ついつい自分勝手に怒ってしまっている感じで。子どもがかわいそう。毎日ではありませんが、かわいすぎるわが子に愛をこめたハグをしています。この愛子どもに届いてほしいと思います。」(30歳代、パートタイム、別居、子ども1人)

B：「母子家庭で何か習い事と思うのですが金銭的に無理です。社会が子育てをなんて絵に描いた餅のようで理想論ばかりで一向に現実性はないと思います。教授って本当に何をされているのかなと思います。文献を読んでもたしかにそのとおりでしょうけど子どもってすべてに当てはめてよいのでしょうか。お金のない子どもは一生がみじめな思いをするのはもう社会が決めてしまっていると思います。暴力をふるう夫を選んでしまった私に責任があるのですが、子どもが私の責任を背負うことになってしまっているのが現実です。この負の遺産を何とかしてやりたいです。頭のいい子なので。」(40歳代、フルタイム、別居、子ども2人)

② 父親がいない家庭での子育ての不安

男親がいない家庭での子育ての不安を3名の母親が述べた。

C：「現在一人親なので父親の存在の有無による影響が心配です(40歳代、パートタイム、同居、子ども1人)

D：「母子家庭で育てているので男親の子どもと接する態度、立場が全く理解できない。かわりになることもできない。子どもにとってこれでいいのかと少し不安である。」(40歳代、無職、別居、子ども1人)

E：「昨年子どもが三才の時に父親が病死しました。幼稚園で母子家庭はうち一軒だけですのでいろいろ辛いです。(父親参観で体力遊び、運動会で他のパパと組んで行く、名簿に父母の氏名を記入することなど)保育園なら母子家庭も多いのでそういう配慮があると…。」(40歳代、無職、別居、子ども1人)

③ ひとりで仕事と子育てを両立することの困難さ

母親一人で仕事と子育てを両立することの困難さ、仕事を見つけることが難しい実態を3名の母親が述べた。

F：「母子家庭で子どもが2人います。パートに出ているんですが、病気した時がすごく困っています。」(30歳代、パートタイム、別居、子ども2人)

G：「最近では母子家庭も増えて周りにも数人私と同じ母子家庭の方もいますが、子どもを抱えて仕事の両立とは本当に大変だと思います。子どもがいても働かせてくれる企業が増えれば…と考えております。」(30歳代、フルタイム、別居、子ども1人)

H：「まだまだ母子家庭は子育てしやすい環境ではないです。仕事も子どもがいることで見つからないです。お金もかかるのに保護の額も年々減っています。」(20歳代、パートタイム、同居、子ども2人)

④ 家族の協力

自身の家族から子育てに協力を得ていることを2名の母親が述べている。

I：「母子家庭ではあるが、私の母と同居しているため家事全般及び子育ての大半を母に依存しています。ただ、父不在の家庭で

も一般にいう「普通の家庭」でも楽しくしっ
かり過ごせるということをおの子どもをは
じめ、社会から認めてほしいと思います。
(やはり母子家庭に優遇されているという偏
見もまだまだあります。)(30歳代、フルタ
イム、同居、子ども1人)

J：「母子家庭でありながら、私の父と母の
協力を得て、本当に心身共に健康で心のあ
たたかい子どもに育てられています。家
族の愛情は本当に大切な物であると感じて
おります。」(30歳代、フルタイム、同居、
子ども2人)

⑤ その他子育て全般に関する悩み、意見

その他の11名は、ひとり親とは関係なく、叱
り方、反抗期の子どもの対応、保護者との対応
の悩み、余裕のない子育、子育て情報、子育て
支援に対する意見などについて述べている。以
下、その一部を示す

K：「叱ると怒るの一線がよくわからない。」
(30歳代、無職、別居、子ども2人)

L：「叱るとつい感情的になってしまう。」
(30歳代、無職、同居、子ども3人)

M：「反抗期の時の対応。」(30歳代、パート
タイム、別居、子ども1人)

O：「私自身仕事をしているのですが疲れて
いたりすると一緒に遊んだり…なかなかか
まっていられない。もっと子どもとの時
間を大切にしなければ…と思っているので
すが。」(30歳代、パートタイム、別居、子
ども1人)

P：「同じ年の保護者との距離感が難しい。」
(30歳代、パートタイム、別居、子ども2人)

Q：「いろんな情報があっても正しくないこ
とも多いので人によっては混乱と思う。
特にマスコミの在り方はちょっと…疑問。」
(20歳代、パートタイム、別居、子ども2人)

R：「上京区に託児サービスのある所がない
ので困っている。(現在中京区まで行ってい
る。)近くて安い一時保育サービスや託児所
を作してほしい。」(20歳代、パートタイム、
同居、子ども1人)

IV. まとめと今後の課題

2009年1月～3月に、京都市の保育所・幼稚
園を通して、3・4・5・6歳児をもつ保護者
に対して行った質問紙調査データを用いて、ひ
とり親家族と、2人親家族との家庭教育と子育
ての比較を行った。その結果得られた知見は以
下の4点にまとめることができる。

- ① 対象となったひとり親家族の母親は、平均
子ども数が2人親家族より低く、20歳代の
母親が多い。保育所に預ける比率、フルタ
イム・パートタイム、同居の割合が、2人
親家族よりも高かった。
- ② 家庭教育は、本の読み聞かせ、図書館へ行
くこと、動物園や美術館などに行くことな
ど、日常的に必要な不可欠ではなく、時間的
余裕、子どもを連れて外出する際の人手な
どが必要な情操教育の頻度が低くなった。
- ③ 習い事の平均数、大学へ進学させたい割合
が低くなるなど、経済的困難さがうかがえ
る結果がみられた。
- ④ 同居率の高さを背景に、子どもを預ける頻
度は高くなったが、「孤独な子育て」を感じ、
子どもの保護者と話す頻度が低い傾向がみ
られた。
- ⑤ 絵本や本の読み聞かせは同居の頻度が高く、
習い事の平均数はフルタイム、同居の母親
に多くなるなど、先行研究も示すように(神
原2010)、ひとり親家族の階層化がうかがわ
れた。

以上の結果から、ひとり親家族への支援は、
階層に応じた経済的支援に加えて、母親の時間
的余裕のなさを解消するような生活支援、休日
の外出を促進するようなレクリエーションの支
援、母親の孤独感を緩和し、同年代とのコミュ
ニケーションを活発にさせるためのネットワー
クづくりの支援などの必要性が示唆された。

今回の調査では、ひとり親を特定する質問項
目があいまいであった。今後はこの問題点を改
善し、さらに詳細な実態について明らかにして
いくことが課題である。

本調査は、平成21年度京都女子大学研究経費助成を受けて実施した。

本調査の実施にあたりご協力いただいた保育所・幼稚園の教職員、並びに保護者の方々に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 神原文子，2004「離婚母子家庭の自立条件」神原文子編『家族のライフスタイルを問う』勁草書房，159-178
- 神原文子，2006「ひとり親家族の自立支援と女性の雇用問題」『社会福祉研究』97，鉄道弘済会，50-58
- 神原文子，2007「ひとり親家族と社会的排除」『家族社会学研究』18-2，11-24
- 神原文子，2010『子づれシングル ひとり親家族の自立と社会的支援』明石書店
- 湯澤直美，2009「貧困の世代的再生産と子育て—

- ある母・このライフヒストリーからの考察—」『家族社会学研究』21-1，45-56
- 竹村祥子，2009「子育ての二極化の問題点はなにか」『家族社会学研究』21-1』57-60
- 厚生労働省，2006「平成18年度全国母子世帯等調査結果報告」
- 澤田充，2008「熊本市におけるひとり親家庭への支援について」『家族関係学』27，17-21
- 室雅子，2008「研究活動委員会報告 地方自治体における支援策」『家族関係学』27，27-31
- 神原文子，2008「NPO法人 しんぐるまざあず・ふぉーらむの実践から(その1)」『家族関係学』27，3-9
- 中野冬実，2008「NPO法人 しんぐるまざあず・ふぉーらむの実践から(その1)」『家族関係学』27，11-15
- 本村めぐみ，2008「研究活動委員会報告 各自治体調査における「自由記述回答」の結果から」『家族関係学』27，33-38